

絵本 テキスト創作塾 通信 No.5

異常気象に思う

今年の異常気象は、いろんな教訓を与えてくれた。水は自動散水にしているから懸念はなかったが、とても暑くて菜園に顔を出すのもやっとなりで、かろうじて収穫はしたものの、雑草は繁るままにするしかなかった。

特に例年収穫が減る7月半ばから8月の収穫にはびっくり仰天の大収穫になったのだ。

きゅうりとミニトマトは7月で撤収、残ったのがナス、オクラ、ピーマン、シシトウ。これらは毎日収穫しないと大きくなり過ぎ、料理担当からきついお

叱りをうけたものだ。

思うに畑一面に繁茂したつるつきの雑草は、地面の水分保持に寄与し、しかも畑に伸びる根を保護してくれた。しっかりと雑草を退治していた際は、雑草に栄養を盗まれると敵視したものだ。

「青森の奇跡のリンゴ」を読んだときの思いが、これだと思ったのだった。自然に任せれば、自然の営みは自然どうしで刺激し合い成長するというのだ。

当方は、今も投稿原稿や編集中の作品に色んな思いを描き、それを伝えている。これは間違いかもしれない、と思わされた屋上菜園の収穫だった

もっと、作者を信じ、作者の想像や空想などを信じて、待とうと思ったのだ。

書評

タイトル; ライスボールと
みそ蔵と

絵本塾出版発行
横田明子・作
塚越文雄・絵

「ホワット? クラゴッド?」

「ワオ、ファンタスティック!」

ここは、200年以上続いているみそ蔵だ。イギリスから遊びにきたウィルは、蔵を見るのは初めてだ。蔵の神様って本当にいるの?

このみそ蔵『塩屋』では、主人公ジュンのおじいちゃんとお父さんが、代々続く手作りみそを作っている。だから、幼なじみから「みそっ子」と呼ばれてからかわれるのがいやでたまらなかった。

新町小学校四年生になったある日、ユキちゃんがジュンの学級に転入して

きた。家族と三年間イギリスに住んでいて、英語がとても上手。

お母さんはロンドンでも、日本からみそを取り寄せて料理を工夫していたそうだ。

みそ蔵を最初に見学したいと言ったのは、ユキちゃんだ。この地方都市では「蔵」があるのは当たり前。大切に保存されている。

ジュンの家、『塩屋』のみそ蔵は、今もコウジ菌が住み続け、蔵ごとに神が宿るといわれている。蔵はいきているのだ。好奇心で遊びにくる所ではない。

ユキちゃんと出会って、ジュンは変わった。その閉じられた重い扉を、今開けようとしている。新みそをたから取り出し、自分もみそにぎりを作って、みんなに食べさせてあげたい。ジュンのお父さんも、世界に目を向けて塩屋の扉を開けようとしている。蔵見学を外国人の観光コース

にするために。

果たして、ジュンたちのみそ蔵改造計画はうまくいくのか?

日本人の伝統的な食文化としての和食が、ユネスコ無形文化遺産に登録されたのは、ちょうど10年前の2013年のこと。

みそは和食の基本調味料の一つだ。戦国武将の武田信玄は、みその持つ優れた栄養価と保存法をいかして、戦場に持ち込み勝利したという。

みそには、まだまだ知らない人々の知恵が詰まっている。

「ミソ ライスボール」を頬張りながら、さあ蔵を味わい尽くそう。

筆者・笠井 るな
(書評家)

推敲の一方法

第2回「文体」その3

今号は休載します。

作家の言葉

岡倉 天心：(作家)

芸術とは
人生という
幹を取り巻く
葡萄である

小池真理子：(作家)

・藤田宜永との約束

「藤田と死別して以来、時間の流れが変わってしまった。配偶者との死別が、かくも強烈な喪失感、虚無感を与えると、小説を数えきれないほど書いてきたというのに、ここまでのものだとは想像していなかった。私は自分の作家としての想像力の貧困さを羞じております」

「あなたの死に関して沈黙を守ることはできないと思う。あな自身のことを書くのではない。あなたの死を前にした私自身の心の動揺、不安、恐怖、哀しみ……。書きたいも

のがあるとしたらそれしかなく、私が作家である以上、書かない選択肢はない」
「藤田さんの真意に伝えるには、死別の体験を作家として『作品』にする必要があった。個人的な哀しみに埋もれて、こんなに悲しい、こんなにせつないと訴え、感情を垂れ流すだけで終わってしまう体験手記のようなものは書きたくなかった」

「すべて実際にあったことです。ストック原稿は作らず、締め切りを前にした、その時々の、私の目に映るもの、心の中を流れたものだけを書くようにしていました」

「読者のみなさんからの感想は、今も繰り返し読んでいます。自分が味わった折々の時間、ことばにならない感情の群れを、こうしたかたちで文章の中に残し、様々な想いの中で読んでくださる大勢の読者とつながり続けた、というこ

とは、本当に贅沢で幸福なことでした」

「季節が巡る1年というのがちょうど良い区切りでした。何かを狙って書いたわけではない。自分の中にあるものを綴っただけなのですが、かつて、これほど読者と真に心が響き合う、無限の共同体のようなものが生まれたことはありませんでした。『梟』ロスになっているのは、私の方かもしれません」

伊東 玉美：(教授)

文学的知識を豊かにしても、例えば経済活動にはつながらない、と考える人がまだ残っているとしたら、それはあまりに古い発想でしょう。

ゲームの流行などを持ち出すまでもなく、人が何をきっかけに物を買うかの根源には、いつの時代にも人の心があり、それらどこに光を当てるかだけが、時代によって異なるの

だと思われま

す。文学作品は、人の心-人の価値観-の本質と変遷を知るための宝庫です。そこから何かを引き出すかは、例えば市場を相手にする方々の、腕の見せどころだろうと思います。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水のあらず」で始まる『方丈記』の作者鴨長明は、『発心集』という仏教説話集も書きましたが、その序文で仏教説話を語る際の手続きを省く方針を宣言します。

それぞれの説話は仏道心を育んだり自らを改めたりするきっかけになればいいという考えからでした。

当時、「説話」とは語り残さなければならない「事実」を語るもので、仏法には、確かな根拠に基づき、インド、中国、日本の例を見渡しながら語る、というルールがあったのですが、長明は固有名詞の確認にこだ

わらず、また、身近すぎるとそしりをまねきかねに、日本の例を専ら語ったのです。

アルスノーの言葉

(カナダ絵本作家)

「ねえ、パパ、どうしてうみって あおいの？」

読者に尋ねたくなる。

ベッドで眠りに入る前の女の子にこんな筆問をされたら、どうこたえますかと。多くの方は科学的な理由を、幼い子にもわかるようにどう説明したらよいか、苦勞するに違いない。

だが、絵本「めをとじて みえるのは」のパパは、こう答えるのだ。

「まいばん きみが ねむると、サカナが ギターを とりだして かなしい うたを うたって あおい なみだを ながすからさ」

2023年9月16日

絵本テキスト創作塾事務局；発行